

源氏物語の「生きる」——桐壺更衣断章

松 井 健 児

一

桐壺更衣きりつほのういの父は、按察使大納言あぜちという地位にあったが、更衣を残してすでにこの世を去っていた。母北きたの方は大納言の、娘を宮中に出仕させたいという遺言を守って、桐壺帝の後宮じゆだいに入内させた。更衣という後宮での地位は、父が大納言であったことに由来する。それに対して、大臣らの娘は女御にようごという地位で入内するのであり、後宮での立場が女御らに劣ることは、うたがいようのないことであった。まして、父はすでに亡くなってからの入内であるため、政治的、経済的な後ろだてのないことも明白で、本来ならば入内それ自体が、無謀ともいえる出来事であった。

そのような桐壺更衣の宮中での生活を守ったのが、母北きたの方の教養だった。母は旧家の出身で、宮中の古いしきたりに明るかった。何事も先例を重んじる宮廷にあって、母の知識は、桐壺更衣の身ごなしを、品位あるものとして保

つことに成功したのだと思われる。宮中の伝統に精通した人は、桐壺更衣のことを「心ばせのなだらかに、めやすく、憎みがたかりし」(一一二五)と認めていた。桐壺更衣の性格は穏やかで、感じがよく、とても憎めない女性であるというのである。

ところが帝が、他の女御や更衣を差し置いて、桐壺更衣ばかりを溺愛したことによって、悲劇がおこることとなった。帝からの寵愛が深く、第二皇子を出産したことによって、周囲からの激しい嫉妬を受けることとなったのである。帝からの愛情を受けること、帝の子をもうけること、その子が男子であることが、宮廷女性たちの共通の目標だった。その子がやがて、帝のゆるしを得て春宮、皇太子となり、ついで次の帝となれば、その帝の母は皇太后であり、母の父親は帝の外戚として、臣下にありながら、もつとも権力の中枢に近い立場を得ることになるからである。こうした、帝との血縁関係によって、ときの最高の権力は形成されていた。後宮の女性たちは、帝との個人的な愛情関係があつて入内するのではなく、一族の栄華の可能性という、重い役割を背負つて入内する。目的をかなえることが女性たちの生き方となり、それはやがて、みずからを他の女性たちと比較することとなる。競争社会である。

劣位に立たされた女君は、優位の女性をうらやみ、うらやむだけでなく、一族の力をも借りて、身体的にも精神的にもその女性を攻撃する。桐壺更衣は、帝の部屋に向かう廊下に汚物をまかれ、扉のある渡り廊下に閉じ込められた。精神的に追いつめられた桐壺更衣は、心労のあまり病死する。嫉妬と迫害という後宮社会のあり方が、ひとりの女性をこの世から葬つたのである。帝との間に生まれた第二皇子が数え年で三歳の夏のこと、のちの光源氏である。

(帝) 限りあらむ道にも、後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄てては、え行きやらじ、とのた

まはするを、女もいとみじと見たてまつりて、

(桐壺更衣) かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

(「桐壺」一一二二)

桐壺の帝は、病で衰弱する更衣をついに後宮から手放し、里へ帰ることを認める。後宮の女性であつても、宮中で死ぬことはゆるされないからである。帝は「後れ先立たじ」、死ぬときもいっしょにと、約束したではないかと更衣に訴える。死へと向かう道であつても、共に行きたいと願うのである。帝のことばに、更衣もまた身にしみて感慨が迫るのだろう。その思いが、歌のかたちとなつてあらわれる。

桐壺更衣は、いまとなつては、帝との死別の道を行かなければならないことを覚悟する。しかし、自分が行きたいのは死へと向かう道ではなく、命を満たす生きる道であるとうたう。「いかまほし」は、「行きたい」と「生きたい」との掛詞であるが、ここで桐壺更衣は、はっきりと「生きることを願ひ、それを声にして訴えたのである。

じつは桐壺更衣の死にさいしてのことばは、物語のなかでは、ほとんど語られていない。みずからの境遇に、あわれを深く感じながらも「言に出でても聞こえやらず」「思いを申し上げないとあり、帝のさまざまな問いかけにも「御答へも聞こえたまはず」、ご返事を申し上げず、また、この和歌の詠出にさいしても「聞こえまほしげなることはありげなれど」、申しあげたそうなるものはあるものと、ことごとく、その思いがことばにならない様子が語られるのである。そうしたなかにあつて、唯一のことばらしいことばといえは、「いとかく思ひたまへましかば」(一一二二)だけであつた。しかしこれにしても、本当にこんなことになるかわかつておりましたらと、無念な死を予感できなかったことを悔やむ、最後までを言い切らない、ことばのかげらのようなものではなかつたか。

物語は、桐壺更衣の死にさいして一首の和歌だけを、たかだかと掲げたのである。「いかまほしきは命なりけり」とは、力をふりしぼり声をかぎりにうたわれた、まさに絶唱である。帝はこの歌に返歌を付していない。そのような余裕などない、悲しみの現れとも思われるが、この歌のもつ厳しさが、中途半端な返歌を寄せ付けなかった、あるいは返歌のしようがなかったというのが実際のところではなかっただろうか。

「生かまほし」、生きたい、ということが、この歌のメッセージである。「生きる」ことへの切実な願いが、『源氏物語』の冒頭にうたわれたことになる。『源氏物語』に収められた七百九十五首の和歌の、冒頭の一首がこの和歌であった。そしてまた、桐壺更衣は『源氏物語』において、この一首の歌だけをうたい、死に、この物語から姿を消すのである。『源氏物語』の冒頭にあつて、この物語に流れ続ける主題のありかを印象づける名歌といつてよいのではないだろうか。生きる、古語では「生く」とは、『源氏物語』においてどのような思いをあらわすことばだったといえるだろう。

また、そもそも桐壺更衣は、なぜ「生きたい」と思ったのだろうか。桐壺の帝への愛着なのか、幼い皇子への思いなのか、なんとしても皇子を春宮にという、家の意思への願いなのか、さまざまな思いが導かれそうになるもの、しかし『源氏物語』には、これほど明確に「生きる」ことを求める歌は、この一首をのぞいて、ほとんど見出せない。

一一

『源氏物語』に見える「生く」という表現は、「生ける世」「生ける限り」「生ける世の限り」といった用い方が多く、

多くは「生きている間」「生きている限り」といった意味での「生涯」、あるいは「人生」の意味であらわれ、桐壺更衣のように、作中人物がみずからの生のいとなみを自覚的、あるいは、いまここに生きている実感として集約的に表現することはまれである。

末摘花は父の死後、暮らしむきも思うようにならず、邸も荒れ果ててしまった。女房らもそんな末摘花をおいて次つぎに去り、とどまった者も、いつその邸を手放すようにと願ひ出る。しかし末摘花は、わたしが生きている間「生ける世」は、けっしてそのようなことはしないと泣くばかりだった。この邸は、親から受け継いだもの、親の霊がとどまり守ってくれている場所なのだと言つて、聞き入れない。「生ける世」(蓬生「二―三二八」)は、末摘花の願っているみずからの人生であり、貧しくともその永続不変を願う、過去と将来へとわたる時間のすべてだった。

一方、みずからの失態から都を離れ、須磨へと下る決意をした光源氏は、都の人びととの別れの歌を取り交わすのだったが、そのなかでも、紫の上へ告げた歌は深い悲しみのこもるものだった。

(源氏) 生ける世の別れを知らで契りつつ命を人にかぎりけるかな

(「須磨」二―一八六)

源氏の言う「生ける世の別れ」とは、生別、生きながらの別れを意味する。源氏にとって、いちど都を離れたならば、無事に帰還できるという確かな保証はない。最愛の人である紫の上との別れは、永遠の別れとなるかもしれないのである。それでも、源氏の「生きる」時間は続くのであり、それはまた、紫の上にとつても同じである。「生ける世」は、たとえどのようなことがあつても、それを受け入れることが前提とされ、変えられることなく『源氏物語』の人びと

をつつみこむ、おおきな時間の流れである。源氏は、こんな別れがあるとは予想もしなかったと、その思いを歌にして述べる。思うような生涯、あるいは平穩な生涯を望むことさえ自由にならないことが、物語の出来事として平然と示される。

人生や生涯は、人の望むようにはならないものとして語られる。しかし、そうしたなかにあって、「生けるかひ」という、「生きる」の用い方は、人生への肯定感をあらわす表現として、慣用的にいくつかがあらわれる。「生きるかひがあった」と、生きることそのものに心からの価値を実感する人物として、「若菜下」の巻に見える、明石の尼君がいる。源氏と明石の君との間に生まれた姫君は、入内のち、源氏の望みどおり、帝の第一皇子を出産する。やがて皇子は春宮となった。源氏にとつても、またなにより、明石一族にとつての幸いの絶頂期といえよう。明石一族が長年、願をかけ信奉してきた住吉神社への、願ほどの参詣がはなはしく行われた。そのさいの、明石女御の祖母、明石の尼君の歌が次のものである。

（明石の尼君）住すまの江えを生なけるかひある渚なみさとは年とし経かるあまも今日や知るらん
（「若菜下」四—一七三）

住の江の渚、つまり住吉神のいるこの浜辺を「生けるかひ」がある場所だとうたいあげる尼君にとつて、今日こそが、みずからの「生きがい」をしみじみと感じる時間であったということだろう。住吉詣でへの参列がかない、苦難に満ちた人生を回顧する、年老いた祖母尼君の感慨である。天皇家の血縁として、その系譜にかかわることが、どれほどの幸福感をもたらすものであったかがうかがわれる歌でもある。振り返れば、桐壺更衣はその道のなかばで、病死し

たことになる。

このような皇統へのあこがれをもととした幸福感に対して、婿として迎えた光源氏の世話に、はれやかな生きがいを感じるとする、左大臣の感慨「生けるかひあり」（「紅葉賀」一一三二四）は、立場や考えが異なるといえよう。ここではむしろ、光源氏の持つ絶対的な美や、隠れた王者性の、間接的な表現として読むことができる。一方、須磨の地にわび住まいする光源氏に貝を献上し、そのほうびとして衣を拝受した海人の感慨、「生けるかひあり」（「須磨」二二二一四）は、「かひ」に「貝」が掛けられた冗談の口調であり、また、六条院の春の夜に行われた、上達部たちによる奏樂のすばらしさを立ち聞きする「何のあやめも知らぬ賤の男」（「胡蝶」三一六九）の「生けるかひあり」という感激ぶりなどは、身分差を前提にした、無名の庶民による貴族社会へのあこがれを語るものであって、その語りの扱いはやはり軽いいえるだろう。

それに対して、その人生を対象に「生けるかひありつる幸ひ人」と、率直に語られた女性として、六条院の春の邸に住む、紫の上がいる。

三

光源氏の最愛の女性であり、また正妻格の女性としても語られる、紫の上の人生は、『源氏物語』正編の全体をつらぬくものであり、簡単に総括できるものではない。ただ、さきに述べた「生けるかひありつる幸ひ人」（「若菜下」四―二三八）という批評は、六条院での闘病生活から、やがて危篤となり、ついにはその死が世間のうわさとして広

まったさいの、ある無名の人物の評であることが重要だろう。「うちつけ言したまふ人」、思いつきを口になさる人によって、紫の上の人生が集約された形であるが、無名の人物によって与えられる表面的な賛辞は、世間の紫の上への評判を代表するものひとつとはなりえても、しよせんそれは外側からの一方的な評価にすぎず、どうかすると、それはひそかな羨望や、揶揄すらも含まれるものであった。むしろそれに続く、「足らひぬる人は必ず、え長からぬことなり」、満ちたりた人は短命なもの、という世間のうわさや、「かかると世にながらへて、世の樂しびを尽くさば、かたはらの人苦しからん」、このような人が長生きして、世の樂しみを尽くしては、周囲の人がつらいだろう、といった冷酷な批評は、そのおりの紫の上の孤独や苦悩を、いっそう明瞭にするものである。

「生きたかひがある」といった形での感慨は、容易に口にできるものではない。そのため、それが安易に語られる場合は、それにかかわる人物の、ある軽さの表現としてむしろ逆説的にはたつき、さらには紫の上の場合のように、外部からそれが付与されることによって、紫の上の内面と、世間とのいちじるしい乖離を強調する表現となっている。では、紫の上の実感とはどのようなものであっただろうか。すこし立ち戻って見てみたい。

十歳ほどのときに二条院に迎え取られた紫の上は、源氏の庇護のもとに、子とも妹とも思われるような成長をとげ、やがて源氏の妻となった。太政大臣となった源氏が造営した六条院の、春を象徴する東南の邸に、源氏とともに住むことになった紫の上は、世間も認める、源氏の正妻格の女性としての立場にあった。二条院から六条院へという人生からわかるように、紫の上は宮中というものを知らない。「賢木」の巻において、源氏が父である桐壺院の崩御という重大事にあい、悲嘆のあまりなくさめを求めて出かけたのは、麗景殿女御であり、その妹の三の宮、のちの花散里のもとだった。麗景殿女御は、桐壺院の女御のひとりであり、源氏は花散里とも宮中でかりそめの出会いがあった

ことが語られている。つまり、父帝の在世中の後宮を知り、ともに思い出を語ることができる人物として二人は選ばれたのだといえる。紫の上では、その役目をはたせないのである。

もつともそれは、桐壺更衣があじわったような、後宮社会の女性たちによる過酷な競争社会を、紫の上が知らないですんだ要因となっていたともみなせるだろう。紫の上は、光源氏を中心とした六条院の女性主人として、幸福な生活を送っていたかに見えた。ところがそこに、朱雀院の第三皇女、女三おんなさんの宮みやが光源氏の正妻として、六条院こしに興入いりいれた。「若菜」上・下の巻は、紫の上が体験するもつとも重い人間関係の悲劇が語られる巻となった。

光源氏の正妻は、「葵」の巻で死去した葵の上と、女三の宮みやしかいない。婚姻は、家と家との合意によって行うものであつて、紫の上と光源氏のような個人的な関係は、社会的には、本来結婚とすら認められないものだった。さきの帝である朱雀院が溺愛した女三の宮に、紫の上が身分的になかなうはずもない。また、そのような女性を六条院にあらたに迎え入れた源氏に対する思いが、おのずと冷ややかになるのもしかたのないことだった。「若菜上」の巻は、それでもなお、六条院の調和のために心をくたく紫の上の様子が語られていた。

しかし、女三の宮が興入れて六年がたち、今上帝があらたに即位した「若菜下」の巻にいたつて、状況はおおきく変わる。この巻の冒頭近くにおいて、紫の上の出家の願いがあきらかにされるのである。紫の上が源氏に出家を願ひ出たさいのことばが、つぎのものである。

今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかにおこな行ひをも、となむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地するよほひ齡としにもなりにけり。さりぬべきさまに思おほしゆるしてよ。

〔若菜下〕四——一七六

仏前での読経礼拝という勤めを「行ひ」という。「さりぬべきさま」とは、そのことだけに心をそそぐこと、つまり出家生活をさす。紫の上は、みずからが生きている世というものを見とどけた、というのである。あるいは見限った、あきらめたといつてよいのかもしれない。しかしこの世ではない場所へといけない身にとっては、来世のこのことを念じる出家者への道を選ぶほかないともいえよう。しかし源氏はそれをゆるさない。

物語の別の箇所では、「さらむ世を見はてぬさきに」（四―一七七）出家したいと願っていた。いまは他の女性たちにひけをとらずにいるものの、源氏の愛情はやがて衰えるだろう、そうなる前に、というのである。

六条院で盛大な女楽おんながの催しが行われた翌朝、紫の上はついに発病する。病のなかにあつてなお、出家を望むものの、源氏は紫の上とのいまの関係を手放せず、ゆるさない。重い病を氣遣つて、六条院から二条院へと居所をうつすものの、紫の上はついに絶命する。源氏のもとに、「絶え入りたまひぬ」（四―二三三）、お亡くなりになった、という知らせがとどくのである。紫の上絶命のうわさは、すぐにも世間にひろまるほどの重大事だった。さきに見た、「生けるかひありつる幸ひ人」「足らひぬる人は必ず、え長からぬことなり」といった、無慈悲な批評は、このときのものである。

しかしその後、物語は「生き出す」ということばで、紫の上の蘇生を語る。「生き出でたまふ」、生き返りになられる、という語りは三度にわたつてくり返される（四―二三五、二三九、二四〇）。紫の上の死が語られることは、物語の「生きる」ことの対比において、重い意味を持つている。「生きる」ことの対極にあるものが「死ぬ」ことであることを、あらためて読者に強く差し出しているからである。さて、そのときに紫の上が望んだものが、やはり出家

の実現だった。源氏は正式の出家を認めず、在家信者のしるしとしての五戒ごかいだけをゆるすものの、紫の上の衰弱した姿に心を深くいためる。紫の上は、つぎのように思う。

世の中に亡くなりなむも、わが身にはさらに口惜くちをしきこと残るまじけれど、かく思おほしまどふめるに、むなしく見なされたてまつらむがいと思くまひ隈なかるべけれ。

〔若菜下〕四—二四二

紫の上は、死んでもよい、心残りはない、と思うのである。しかし源氏が「かく思おほしまどふめる」、今ですらこのように、うろたえておられるのだから、自分が死んだのちの源氏の深い悲嘆を思うと、それではいかにも思慮が浅いように思われると思う。こうした紫の上の思ひは、その現実の死が語られる「御法みのり」の巻の冒頭まで変わらない。

あながちにかけとどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心うちの中にもものあはれに思おほされける。

〔御法〕四—四三九

むりやりに生きたいとは思わない、ただ源氏が嘆くだろう、「思ひ嘆かせたてまつらむ」と思うとあわれであると、紫の上は思う。桐壺更衣とは違い、紫の上には源氏との間に子がいない。さきの「若菜下」の巻での、紫の上の、死んでも心残りはないという思ひが述べられたのち、『源氏物語』は「生く」という表現ではなく、「経ふ」ということばで生きることをあらわすようになる。「経」は本来、時がすぎる、年月がたつ、を意味する。「世に経る」あるいは「世

にながらふ」という表現は、「生きる」ことを意味しているものの、遠回しで、間接的な表現である。

四

紫の上の二度の死が語られるのは、「生きる」ことの意味を、問いとして読者に差し出しているからだと思われる。生きることを突き詰めていくと、死の問題があらわれてくる。『源氏物語』のなかで「生きる」関連の言葉がもつとも頻繁にあらわれるのは、「手習」の巻である。「手習」の巻は、一度死んだと思われた浮舟が「生き出す」、蘇生したところから語られるからである。

浮舟は薫大将の庇護のもとに、宇治の地で生活していた。そこへ浮舟を恋慕する匂宮が、薫を装って近づいたことから、浮舟の悲劇は始まった。匂宮との関係が薫大将に知られてしまい、浮舟は逃げようのない苦しい立場にたたされる。浮舟は宇治川への入水（しゅすい）を決意する。『源氏物語』において、みずから進んで死ぬことを選択する人物は、浮舟だけである。当時、支配的だった仏教的な価値観では、自死は最大の罪だった。それにもかかわらず、ただひとり頼りにしていた母との関係をも断って、浮舟は死を選ぶ人物として語られる。それほどの苦しみは浮舟をおそっていたと考えられるものの、物語はむしろ、浮舟のその後を語りたかったのかと思われる。浮舟の自死は、紫の上の初度の死と、死の意味あいが違う。また桐壺更衣の死とも、異なっている。ただ、やはり一度は死ぬほどの苦しみを経た人物が、どのようにして生きるのかを、物語は追っている。

浮舟は雨のなかを宇治川にむかっていたものの、気を失った。そして、大木の根もとに「白き物のひろごりたる」

ようであつたところを、横川の僧都を中心とした僧たちに発見される。横川の僧都には妹がいたが、娘を亡くし尼となつていた。妹尼は、浮舟を亡き娘の身代わりに観音が授けてくれたものと信じて、心をこめて介抱する。浮舟は、生き返ることとなる。紫の上と同様に、「生き出づ」という人生が語られるのである。しかし、息を吹き返した浮舟が最初に語ったことは、つぎのようなものだった。

生き出でたりとも、あやしき不用の人なり。人に見せて、夜、この川に落とし入れたまひてよ。

〔手習〕六一二八八

浮舟は、生き返つても生きる価値のない人だと、みずからを言い定める。ここには、生きることへの意欲は見られず、逆に死ぬことを望み、それにむかつて突き進む人物が語られている。浮舟が自死を決行したのは、三月の末だったが、妹尼のもとで、四月、五月と、時がたち、やがて浮舟の身体の回復にもなつて、その思いにも変化が生じることとなった。浮舟は心のなかでは、「いかで死なん」（六一二九八）、なんとかして死にたい、と思つている。ところが現実には「生きとまる」、生きるという状態にとどまっていると、語り手はその事実だけをたんたんと語る。ついで、浮舟は妹尼に、つぎのように願ひでるのだった。

尼になしたまひてよ。さてのみなん生くやうもあるべき。

〔手習〕六一二九八

「生くやうもあるべき」、生きられるかもしれないと、浮舟が語るのである。死にたい、から、生きられるかもしれない、への変化は劇的だといえよう。それが成り立つための条件が、出家である。浮舟は自分が生きていることを、誰にも知られたくないと思ひ、現実にも、今は知られていない。出家を成り立たせる根本的な考えは、人がこの世とすべての縁を絶ち、すべての執着を断つことである。そうであれば、いま、実際にはそれ以前の社会とは無縁な状態にある浮舟にとって、ここである出家とは、はなはだしく精神的な心の問題だということになる。死ぬことと、生きることが、出家という地点において反転し、なおもつながるものとして、とらえられていることだろう。これが「手習」の巻での、浮舟にとつての生きるということなのだと思われる。浮舟の願ひはかない、出家完成の途次の段階である、五戒だけを授けられる。「若菜下」の巻での、絶命した状態から生き返ったのちの、紫の上と同様の立場である。

紫の上の場合は、その後もなお出家の完成を願ひでもものの、ついに源氏のゆるしを得ることができず、現実の死をむかえることとなった。『源氏物語』は紫の上の場合も、桐壺更衣と同様に、死にさいしての一首の和歌を記している。秋になり、植え込みの萩を見ようとひじ掛けにもたれつつ、起き上がった紫の上の姿を、源氏はとてもうれしいこととして見る。そのさいの紫の上の和歌が最期の歌となった。

かばかりの隙あるをもいとうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、つひにいかに思し騒がんと
 思ふに、あはれなれば、

(紫の上) おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

〔御法〕四―五〇四

床とこから身体からだを少し起こした程度でよろこぶ源氏を、紫の上は気の毒に思う。さらに、実際に自分が亡くなることになつたら、源氏がどれほど悲しむかと思うと、紫の上の心が痛むのだと語られる。紫の上の和歌は、萩に置いた露に自分の身をたとえたものである。風が吹けば、この露も乱れ散ってしまうだろうという歌のことばかり、紫の上は露のように「消えはて」る。紫の上は、みずからにおとずれる死を、すでに受け入れていたのだと思われる。そのうえで、紫の上が思うのは、この世に遺されることになる源氏の悲しみであり、それへのいとおしみの感情だったと語られていたことを、ここでは読んでおきたい。

一方、五戒を授けられた浮舟はその後、穏やかな日々を送ることができたかというところ、かならずしもそうではなかった。『源氏物語』はその後、妹尼の亡き娘の夫である中将の訪れを語る。中将は妹尼の住む小野に身をよせる浮舟の存在を知り、恋情に心を動かされる。妹尼もまた、中将と浮舟との婚姻を願わなくもない。しかし、薫と匂宮との関係のなかで、思いのままに扱われ、心も破れ、現実の死までを経験した浮舟は、それを望むことはなかった。妹尼の留守にやってきた中将から逃れるために、浮舟は普段はけつして入ることのなかった、妹尼の母尼の住む部屋へ逃げ込んだ。しかし夜中に見た老いた尼の姿のあまりの恐ろしさがきっかけとなり、浮舟はみずからの人生を深々と思っておくこととなる。いちどは入水を決意し、生き返り、それでもなお身におよぶ、苦しみと悲しみの果てに、浮舟は出家の完成を心から願う。

なほ世づかずのみ、つひに、えとまるまじく、思ひたまへらるるを、尼になさせたまひてよ。世の中にはべると

も、例れいの人にて、ながらふべくもはべらぬ身になむ。

〔手習〕六―三三五

浮舟は「尼にしてほしい」と横川の僧都に懇願した。そのことばに見える「世づく」「世のなかにはべる」「ながらふ」は、どれも広くは「生きる」ことを指している。しかしそれができないから、尼にしてほしいと願うことばは、五戒を受けたさいの浮舟のことば、「尼になしたまひてよ。さてのみなん生くやうもあるべき」の、くり返しのように見える。死ぬことと、生きることが、出家という地点において反転し、なおもつながるものとして、とらえられているように思われる。横川の僧都の手によって、出家を果たした浮舟の感慨、「これのみぞ、生けるしるしあり」(六―三四〇)に、それがうかがえる。

「生けるかひ」という表現は『源氏物語』に少なく、簡単に手に入る実感ではないことは、さきに確認したとおりである。浮舟の「生けるしるし」は、「生けるかひ」にも増して重い感慨だと思われるが、それはみずからが尼の姿になったときのものだった。

五

『源氏物語』で実際に出家の完成が語られる、主要な作中人物としての女性は八人いる。藤壺おんなさん、女三みやの宮、空蟬うつせみ、朧おぼろ月夜つきよの君、六条ろくじょう御息所のみやすしろ、朝顔あさごの姫君ひめぎみ、源典侍げんないしのすけ、それに浮舟である。出家の理由や状況はそれぞれ異なるものの、浮舟以外は皆、貴族社会のなかでも高い地位にある、めぐまれた人びとだといえる。もっとも空蟬の場合は、

かならずしも高い地位だったとはいえないが、それでも二条東院に部屋をもらい、源氏の援助を受けて出家生活をいとなんだ。源典侍は、亡き桃園式部卿ももつきのしき宮の邸みやに朝顔の前齋院とともに生活し、出家生活を送っていた。このような物語の展開を読むかぎり、貴族女性の在家での出家生活は、それを支える経済的な背景を必要とするものであることを強く意識させられる。そのため、浮舟のような社会的に弱い立場の女性の出家を語るのとはとても難しいことだと思われる。その意味で、小野の妹尼の設定はきわめて巧みで、本来ならば簡単にはできない出家という出来事を、ともかくも現実味をもつて語りきったといえる。それに対して、紫の上の場合は、経済的な背景となるはずの、源氏のゆるしを得られなかったために、ついに正式の出家を果たせない人物として生涯を終える。

紫の上の場合も、浮舟の場合も、出家の完成が生きることの条件のように語られている。さきほども確認したように、出家を成り立たせる根本的な考えは、人がこの世とのすべての縁を絶ち、すべての執着を断つことである。執着こそが苦しみの原因であると、仏教はみなしている。それならば、執着の原因を取り去れば、苦しみもまた解消すると考えられる。そのための方法が、社会的な地位、財力、血縁を含むすべての縁を絶つこと、つまりそれが本来の出家ということになる。家にあつての生活を続けるうえで、どこまでそれが可能かはさまざまだと思われるが、すくなくとも解決しなければならぬものとしての、心のあり方や、日々の務めとしての出家生活は有り続けることになる。また、それが目標ともなる。紫の上や浮舟が、その苦しみと悲しみの果てに、出家というアイデア、理念がめばえたとしても自然なことだと思われる。

もつとも、出家を果たしたのちの浮舟には、つぎのような歌が見える。

(浮舟) 雪ふかき野辺の若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべき

〔手習〕六一三五

雪深い野辺の若菜もこれからは、あなたのために摘むことにいたしましたよう、そしてあなたのために年月を重ねましょう、という。この和歌のあなた「君」とは、小野の妹尼のことである。出家の身となった浮舟にとっても、妹尼は、以前に変わることのない、心の支えであったことがうかがえる。

では、紫の上にとつての源氏はどうだっただろうか。源氏のことを気遣う紫の上にとつても、源氏の存在は生きるうえでの十分な支えだったとは、源氏が女三の宮の輿入れを迎え入れた「若菜上」の巻以後の展開を読む限り、なかなか了解しにくいのではないだろうか。だからこそ紫の上は出家を思うのであり、また、源氏はそれをゆるすことができなかつたのだろう。しかしたとえそうであっても、紫の上は、自分の死後の源氏の悲しみを思いやるのであり、それは最期のときまで変わることがないと語られている。

さて「桐壺」の巻の、桐壺更衣の最期の歌を振り返ってみよう。

(桐壺更衣) かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

〔桐壺〕一一二二

「いかまほし」は、「生かまほし」であつて、それは現在の表現では「生きたい」という意味になる。さきに、このときの桐壺更衣の心情を推量するなかで、つぎのような問いを立てた。そもそも桐壺更衣は、なぜ「生きたい」と思ったのだろうか。桐壺の帝への愛着なのか、幼い皇子への思いなのか、なんとしても皇子を春宮にという、家の意思へ

の願いなのか。しかし紫の上や浮舟、またそのほかの人びとの「生きる」ことへの思いや、その表現を読みすすめてきたいま、ひよっとすると、こうした問いそのものが適當ではなかったのではないかと、と思われるのである。『源氏物語』に、これほど率直に「生きる」ことを求める歌は、他に見いだせないからである。桐壺更衣は、帝の妻になることを前提に入内し、更衣という身分で後宮に仕えていた。そのため桐壺更衣の場合には、紫の上や浮舟が、死と生の転換点として望んだような、出家という選択など、そもそも存在しないのである。

しかしそれでも、死の間際まぎわに、桐壺更衣は「生きたい」と痛切に願った。そこには、帝のため、子のため、といった誰かのため、という要素は入り込めないのではないだろうか。奇妙な言い方になるが、それは自分のためといった思念を経たものですらなかったのではないか。更衣の和歌は、ただたんに「生きる」ことを良きこととして、率直に示している。読者は、誰かのために生きたいと願う更衣を望みがちである。ただそれは、読者のわがままだろう。死の間際にあつて更衣は、ただ生きたかった、それが『源氏物語』の冒頭に示された「生かまほし」の意味だと思われる。

『源氏物語』が作中人物とともに、もっとも大切にしていたことのひとつが、「生きている」という感覚なのだと思われる。そうした感覚を、桐壺更衣の願いは、物語の冒頭にあって、きわめて純粹なかたちで提示したといえよう。しかし物語は、それを自分ではない誰かのためという、みずからの外へと開いていった。紫の上のかかわった源氏という人物の意味は、紫の上が判断するものだろう。浮舟にとつての、小野の妹尼の意味も同様である。人を苦しめるのは人であるが、再び生きようと思わせるのも、やはり人であった。たとえどのようなかたちであっても、人は変わることができるということを、物語は語りたかったのだろうか。『源氏物語』は、さまざまな人物の死を語ることに

おいて、重く苦しい物語であるが、それはそのまま、生きることの意味を問い続けていたこと、何よりのあかしてあつたといえるだろう。

*『源氏物語』の本文は、阿部秋生・秋山虔、他校注「新編日本古典文学全集」『源氏物語』に拠り、巻とページ数を記した。わたくしに表記を改めたところがある。

*「生く」は、自動詞の場合は上代・中古には四段活用、また中古の末頃から上二段活用があらわれ、以後は上二段活用が一般的となる。現代語では、上一段活用。なお、他動詞の場合は、下二段活用。

*『源氏物語』の作中和歌で、「生く」と「行く」を掛詞として用いた和歌に、「いきてまたあひ見むことをいつとてかかぎりもしらぬ世をばたのみむ」（松風「二―四〇四」）がある。明石の君が、都へと旅立つさいの明石入道との離別の歌。生き別れであるが、実際に明石入道と明石の君たちが、再び会うことはなかった。

*「生く」と「行く」を明らかな掛詞として用いた例は、勅撰集にも多くはなく、八代集には、次の和歌が見える程度である。

『後拾遺集』「都にもこひしき人のおほかればなほこのたびはいかむとぞ思ふ」（藤原惟規、卷十三、恋三、七六四）。

『新古今集』「別れ路はこれやかぎりの旅ならんさらにいくべき心地こそせね」（道命法師、卷九、離別、八七二）。

（まつい・けんじ）